

# 人間中心デザインと 不便益は仲良し（続き）

京都先端科学大学

川上 浩司

不便益、つまり「不便だからこそ得られる益」があるという話の連載をしています。その逆で、便利な道具を使っていると知らず知らず失われることもあり

ます。格好の題材として先々月号で取り上げたのは、私の周りでは今年になって話題になっているチャットボットチャットボットです。これは、文章を作ってくれる人工知能です。学生なら自分の代わりにレポートを書かせたり、プログラマーなら自分の代わりにプログラムを書かせたり、小学生なら

自分の代わりに夏休みの宿題の読書感想文を書かせたり、作家なら自分の代わりにエッセイを書かせたりと、便利に使える道具です。

不便益を研究している者としては、これらの使い方がすべて自分を「代替」させていることが気になります。不便益とは、自分が手間をかけたり頭を使ったりすることによって自分に得られる「益」のことです。ですから、自分を「代替

してくれる道具は、今まで得られていた「不便益」を奪い去るのではないかと、心配してしまいます。奪われて初めて気づく不便益もありますが、もし奪われる前から気づいていれば、あらかじめ防波線を張っておきたいものです。人間に対する道具の関係は、「代替」の他にはないのででしょうか？

先月号では、「代替」に代わる人と道具（人工知能システムを含む）との関係を考えるときには、人間中心設計（human-centered design）が示唆に富むことを紹介しました。そして、人間中心設計のエポックメーカーの一人であるノーマンさんと彼の著書の日本語訳本『誰のためのデザイン？』の話を始めたところで先

月号の誌面が尽きました。今月は、その続きです。

ノーマンさんは『誰のためのデザイン？』の中で「ユーザー中心設計」を提唱されています。簡単に言えば、使う人のことを中心に考えて物事はデザインされるべきだ、という主張です。そういう意味では、人間中心設計や「ユーザビリティ」の高いデザインと同じです。ただ、ノーマンさんは心理学者らしく、使いやすいデザインと使いづらい（使えない）デザインとの違いを認知心理学的に整理されているところが特徴です。

ところがノーマンさん、2005年に「人間中心設計は害悪と思われる」とい

う論文を発表されました。1990年には人間中心設計のエポックを作った人が、今世紀に入って「それは害悪だ」と言うのです。どういふことかと、早速その論文を読んでみました。するとそこには、本来の人間中心設計として、私たちの「不利益」と根っこが同じ考えが述べられていました。

ノーマンさんの主張を私なりに解釈し直すと、以下のようになります。論文が発表された当時、少なからぬデザイナーが「人間中心設計」を浅薄に捉えて、あたかも天動説のごとく、ユーザー様が世界の中心に居てもせず、道具の方が勝手に動いて（働いて）くれる状態を目指していたように思われます。確かに、

間阻害なわけです。

この、「人の行いを前提とする」という根っこが、不利益と共通します。便利であることと楽であることを同一視すれば、究極の便利とは人は何もしないで済むことです。不利益はその逆を向いています。人が手間をかけた頭を使ったりするといふ「行い」は一般には「不便である」と忌避されるのですが、実はそこに「益」があると考えるのが、不利益の前提なのです。

さて最後に、「代替」に代わる人と道具の関係に話を戻しましょう。その関係を模索する時のキーワードは、人間中心設計と不利益が共通して持つ根っこであ

「使いやすい」ことは楽になることで、究極的な「楽」は何もしないことでしょう。だから、デザイナー達が勘違いをしてユーザーは何もしなくて良い状態を目指したのも、なんとなく理解できます。

ノーマンさんは論文で、その状況に釘を刺したのです。人が何もしなくて済む状態は人間中心設計が目指すものではない、と。本来の人間中心設計とは、人の行いを中心に考えてその周辺にある人工物をデザインすることだ、と言いたいようです。つまり、人から人工物に対する働きかけが前提とされています。人は何も手を出せないなんて、とんでもないことです。人が何もせずに人工物が自動で勝手に働くなんて、人間中心どころか人

る「人の行いを前提とする」だと思っのです。そうすると、関係としては「拡張」、「協働」、「支援」、「相手」など、いくつも思いつきます。これは、頭の体操にもなりそうです。「ChatGPTを「相手」にする新しいゲームを設計しなさい」など、大学でのデザイン演習の課題にしてみようかしらん。



川上 浩司（かわかみ ひろし）  
一九六四年生まれ。京都大学工学部、同工学研究科修士。  
京都大学助教授・特定教授などを経て京都先端科学大  
学工学部教授。不利益の研究で学会論文賞・出版賞多数。  
著書に『不利益という発想』（二〇一七）など多数。